

2. 2002 年度図書館の動き

はじめに

2002 年度の本学図書館の動きは、一言でいえば安定期の運営が展開された一年と言えるだろう。つまり、2001 年は、3 月に中央図書館の開館披露式典に続き、新規オープンがあり、8 月に私立大学図書館協会の総会・研究大会が本学を会場に行われ、更にラオス国立大学図書館支援活動や千代田区立図書館との相互協力覚書の締結等々、対外的な大イベントが続いた。それに比べて、2002 年度は、着実な利用者サービスの向上等、内部充実に向けた歩みを開始した。中央図書館の利用は相変わらず、多くの学生・教職員・校友に利用され続けている。また、生田図書館でも休日開館がスタートするなど、「地域間格差」の是正に向けて動き出した。和泉図書館は、2004 年新学部開設等の対応のために、新和泉図書館建設の動きを開始した。

図書館の機能は、学習や研究に有用な資料を選び、収集し、それを組織化（目録化）し、利用に供する。そしてこれら文化的資産である資料を後世の利用のために適切に保存する、というところにあるが、近年は収集する資料媒体の範囲が広がり、いわゆるマルチメディア資料は勿論のこと、学外の諸機関が作成する各種データベースも利用対象としているところに従来にはない特徴がある。

図書館は、大学の重要な研究・教育機関として、2002 年度の諸活動を取りまとめ、本書を今後の図書館運営のために大いに活用していきたい。

中央図書館が日本図書館協会「図書館建築賞」受賞

かねてより中央図書館の建築物を、日本図書館協会「図書館建築賞」候補として応募していたが、めでたく受賞することができた。図書館建設に関わっていただいた多くの学内関係者、全図書館員、共通の喜びである。この賞は、「優れた図書館建築を顕彰し、それを広く世に知らせることによって、図書館建築の質の向上を図る」ことを目的としたものであり、かつ「図書館建築の質はもとより、そこで展開しているサービスも良く行われていること」が受賞条件としている点から見て、非常に価値ある受賞といえることができる。

10 月 23 日、群馬県前橋市で開催された、第 88 回全国図書館大会（日本図書館協会主催）総会席上で、竹内哲日本図書館協会理事長から野上館長に表彰状が手渡された。

受賞決定後は、以前にもまして国内外からの見学者が多数押し寄せている。

この受賞を記念して 2003 年 3 月 14 日サロン紫紺において、館長をはじめ図書委員を含めた全図書館員が一同に会してパーティを催し、受賞の感激に浸った。

私立大学図書館協会関係

本学図書館は、1999 年 4 月から 2001 年 3 月まで、私立大学図書館協会の会長校、2001 年 4 月から 2003 年 3 月まで監事校・常任理事校として重責を果たしてきた。また、2000

年4月から2002年3月までは、国公立大学図書館協力委員会「協力ニュース」主査（飯澤文夫前総合サービス課長）及び事務局として職責を果たしてきた。2003年3月末日を以て、これら私立大学図書館協会関係の役職は、全て終了となった。

一方、私立大学図書館協会と国立情報学研究所は、目録システム講演会（図書コース）を開催しているが、本学図書館職員が講師として活躍している。この講演会は、Nacsis-CATシステムに参加する全国の大学等職員に対して目録精度の維持・向上のために行うもので、本学図書館員に講師派遣依頼があり派遣している。国立情報学研究所からの評価も高い。

（回）る語も書善

海外図書館への支援

1999年度の韓国・翰林大学校日本学図書館、2000年度、2001年度のラオス国立大学経済経営学部に対する図書館設立支援を行った。2002年4月に、これまでの成果の確認及び今後の支援体制についてラオス国立大学、JICA（（財）国際協力事業団）と打合せるために大野図書館庶務課長が訪ラオスした。

また、5月には、ラオスのピマソン教育大臣とソムコット・ラオス国立大学工学部長（その後学長に昇格）が本学を表敬訪問し、その際図書館を訪れ、館長はじめ図書館スタッフが出迎えた。ピマソン教育相からは、継続して支援要請があり、特に、ラオス国立大学中央図書館に対する強い支援要請があった。

山手コンソーシアム

協定に基づく八大学図書館（青山学院、学習院、國學院、東洋、法政、明治、明治学院、立教）の相互協力組織、「山手コンソーシアム」は、このところ安定した動きを示している。相変わらず加盟他大学から本学図書館利用の来館者は、コンソーシアム全体の半数を超え、入超の状態が続いている。

現在運用しているプログラムは、①図書館利用、②目録情報公開、③図書貸出、④図書館職員の相互研修であるが、近々「雑誌分担保存」を開始すべく協議が続けられている。

この相互協力協定は多くの学外図書館関係機関から大いに注目を集めているところである。

「法律図書館連絡会」（法図連）への加盟

これまで法学部（法学部資料センター）が加盟していた「法律図書館連絡会」に図書館が機関として加盟した。これは、法学部資料センターが近々法科大学院図書館（仮称）に改組される予定であること、法学部資料センターに専任職員がいないこと、法図連には大学図書館がメンバーになっているところが大半であることなどがあり、また、法図連幹事からの要請もあり図書館が加盟したものである。

善効の△マスベ図書館

ベビーでやっばい（画士富）evswai.li、△マスベマニエロの利全読書館
や幸校商業、ア」特集を公開が、ア」△マスベ完結書、なるア」用利△マス

新・和泉図書館建設要望

2004 年度から和泉キャンパスに新設学部「情報コミュニケーション学部」の新入生を迎えること、また文系 5 学部のフレックス制（夜 9 時 10 分まで講義を行う）にするという方針が決定された。そこで、和泉図書館の狭隘さ、建物としての古さ、学術情報環境の貧弱さ等から、和泉図書館の建築を館長から学長に要望した。その一方で、事務部長の下に「新・和泉図書館建設 WG」を間中和泉図書課長を座長に設置し、検討を重ねた。その報告書が 10 月 3 日付で事務部長宛に出された。

著者と語る（第 6 回）

例年和泉図書館の開架閲覧室を会場に、主に和泉キャンパスに在籍する学生を対象として、図書館に慣れ親しんでもらおうという意図で開催するものである。今回は 11 月 8 日、「東京牛乳物語」など数々の著作を発行している本学短期大学教授黒川鐘信先生に、最新の著作から、「ウルトラマンから寅さんまで、監督・脚本家・作家の執筆現場 一神楽坂ホン書き旅館「和可菜」の 50 年―」と題し講演いただき好評を博したが、このところ聴講生が少なく、今後の運営に一考を要するところである。

図書館スタッフの充実

図書館を充実するためには、図書館スタッフの充実が焦眉の急である。そのために、以下の二点について検討し実施した。

ひとつは、従来嘱託職員が担っていた業務を「業務委託」としたことである。これは、これまで大学（法人）が採用して配属の方式であったが、様々な課題をかかえていた。それら諸課題を解決するために、業務委託化で解決しようというものであった。安定的で優秀な人材の確保、司書有資格者の採用、将来的には人件費の節約に繋がる雇用などが課題であった。

ふたつには、中途(既卒者)採用による即戦力となる人材(専任職員)の確保である。ここ 3・4 年で専任職員は 10 名削減した。様々な要因があるが、大学全体の人件費削減政策の中専任職員が漸減していた。しかし図書館における専任職員の役割は大きいものがあるので、大学(法人)の理解を得て、2002 年度に既卒者の公募を行い、93 名の応募があり、その中から男女各一名の採用を決定した。着任は 2003 年 4 月 1 日からである。

専任職員の役割は、図書館としてより専門性の高い業務に従事し、培ったスキルをそれぞれの部署で発揮することであり、業務委託者は専任職員の補助的業務を遂行してもらい、全体として質の高い図書館サービスを展開してもらいたい、という意図がある。嘱託職員は 1・2 年のうちに全て業務委託とし、専任職員、業務委託者それぞれがメリハリのある業務展開することで質的向上を目指したい。

図書館システムの改善

図書館業務全体のコンピュータシステムは、iLiswave（富士通）というパッケージシステムを採用しているが、機能補完システムとして様々な開発を継続して、業務効率や

サービス向上に資している。2002 年度夏休み一斉休暇中に、機能向上、ソフトウェアのバージョンアップ等のためにサーバ 7 台のリプレースを行った。更に、利用者自らが、貸出し期限の更新、貸出予約、他図書館からの取寄せ依頼をオンラインでできる「図書館ポータルシステム」を開発しリリースした。利用者からの評判がすこぶる良いシステムである。

全体的に、本学図書館システムの運用のよさは定評のあるところで、他大学からの視察が多いところである。

学部間共通総合講座「図書館活用法」担当者会議

副館長がコーディネータとなり開講している「図書館活用法」は、2000 年度から始まり 3 年を経過した。前期は駿河台キャンパスで、後期は和泉キャンパスで開講している。全てが終了した 3 月に、「図書館活用法」担当者会議を開催した。講義を担当する教員、図書館員総勢 20 名余が集まり、2002 年の反省と 2003 年に向けての改善点などを話し合った。なお、次年度からは、懸案であった生田キャンパスでの開講を確認した。

父母会とタイアップした「地方史」資料の収集

本学図書館資料構成の特色として、日本国内の「地方史・地方誌」の充実がある。全国の地方自治体や各地方の篤志家が発行したそれらの資料は約 8 割の網羅率を誇る。これを 10 割にすべく努力しているが、この資料収集に高知県父母会長から「応援」したい、との申出があり、高知県父母会の事業のひとつとして位置付けていただいた。大変にありがたいことで、この申出を契機に、全国父母会会長に収集への協力依頼を行った。今後とも、全国におられる父母会、校友会等とタイアップして、更に資料の充実に努めたい。

研修生及び図書館実習生の受入

本学図書館は、研修生を受け入れ、数日間にわたり研修及び実習を行っているが、本年度は以下のとおりである。

- ・ 国立教育研究所司書履修者、4 月 18 日
- ・ 韓国淑明女子大生 (3 名)、7 月 18 日～19 日
- ・ 図書館情報大学学生司書課程実習 (1 名)、9 月 6 日～19 日

新学科対応の図書購入

2002 年 4 月から政治経済学部には地域行政学科、文学部に心理社会学科、経営学部には会計学科、公共経営学科が新設されたが、図書館はそれに対応する図書の購入、整理、利用等について検討を重ね、紀伊国屋書店に図書の調達、目録、装備を委託する、いわゆる「書店連携システム」により図書の購入している。これは、政治経済学部には地域行政学科を除き 2003 年度に継続する。

柳美里著『石に泳ぐ魚』の扱い

当作品が、2002年9月最高裁判所において「出版差し止めは憲法に違反しない」と判断したことに伴い、本学図書館としてどう対処するかを検討した。国立国会図書館は、最高裁判決を受けて、閲覧禁止措置をとったが、本学図書館は、「図書館の自由に関する宣言」の本文及びその精神を遵守することが肝要であり、本学図書館が主体的に収集した図書資料(雑誌)の提供は、本学図書館の主体的な意志で行うべきであり、みだりに自己規制すべきでないと考え、当面「当該雑誌に対して特別の措置をすることはしない」事を確認した。

図書館紀要第7号を刊行

図書館の資料を使った研究発表や図書館職員の調査・研究の発表媒体として年1回刊行している図書館紀要「図書の譜」第7号が年度末に刊行された。

なお、「図書の譜」生みの親で、タイトル命名者である元図書館長後藤総一郎教授が、2003年1月12日他界された。後藤先生の図書館長時代の業績は、私たち図書館員の記憶に新しいところであり、後藤先生がまいた種は、近い将来大きく育っていくものと思われる。後藤先生に対し心から哀悼の意を表したい。

図書館スタッフ研修会

図書館スタッフ研修会(構成メンバー:館長、副館長、各種委員会委員長、事務管理職、副参事職員)は、6月21日~22日湘南国際村で行った。テーマは、「各地区図書館の個性化と展望」で、両日にわたりテーマにもとづく報告と意見交換を行った。また11月28日には学内で、「新たな業務課題への対応」と題し、研修を行った。

